

山梨県のブドウ・モモにおける重要害虫

内田一秀
山梨県果樹試験場

本県農業の主要品目であるブドウとモモは、出荷量が日本一である。栽培者と技術者は、二人三脚で様々な課題を解決し、現在の高品質生産を実現しているが、それでも時として問題となる害虫が存在する。本講演では、これらの重要害虫について、被害の状況、現状の対策と問題点、また将来の展望などについて述べたい。

○ブドウ

・チャノキイロアザミウマ：本県のブドウ栽培上、最も重要視されている。微小な口針を刺して、植物から吸汁するため、表面の細胞が壊死し、穂軸の褐変や果粒表面のコルク化などの被害が生じる。クロルフェナピル、スピネトラム、イミダクロプリドを中心とした体系防除を実施しているが、登録内容の変更などにより、頻繁に体系の見直しが必要となるため、有効薬剤の簡易な検定法が求められる。

・クビアカスカシバ：幼虫がブドウの主幹部や主枝などの粗皮下に食入する。被害部位から先は樹勢低下や、場合によっては枯死につながるため経済的な被害が非常に大きい。発生は中山間地域で多い。防除は、カルタップの散布のほか、過去の被害痕を中心とした観察による捕殺を行っている。殺虫剤散布と併用できる防除方法の開発が求められる。

・クワコナカイガラムシ：収穫期が9月以降になる品種を中心に被害が発生している。果房内への寄生や排泄物による汚れと、そこに発生する黒いカビにより、商品性が著しく低下する。粗皮下で越冬する卵囊の除去、幼虫発生期にアセタミプリド、ブプロフェジン、DMTPの散布による防除を実施している。一部の品種で出荷期間を延長する栽培体系が検討・実施されているため、長期間に渡る防除体系が必要となっている。

○モモ

・カイガラムシ類（特にウメシロカイガラムシ）：多発すると樹勢の低下や、枝枯れなどを引き起こす。また、着色前の果実に幼虫が寄生すると着色異常（赤点）になる。多発した枝の剪除やブラシによるこすり落としなどの耕種的な防除のほか、休眠期にはマシン油乳剤、生育期では幼虫発生期に合わせて、ブプロフェジン、ピリフルキナゾン、DMTPの散布による防除を実施している。現在、マシン油乳剤の濃度などの防除体系を見直している。

・シンクイムシ類（特にモモシンクイガ）：定期的な薬剤散布や、果実袋の使用による物理的防除効果により、通常は大きな問題にならない。しかし、県内産モモが台湾に向けて輸出されるようになったことから、植物検疫上の理由によって、モモシンクイガの重要性が増している。

Major Pests of Grapes and Peaches in Yamanashi Prefecture

Kazuhide Uchida

Yamanashi Prefectural Fruit Tree Experiment Station